

釈尊を今に憶う

千賀真順

二月十五日は大聖釈尊の涅槃会である。現代において釈尊を憶うことは意義深きものがあるから、いさゝかその生涯を偲んで学びたい。

梵・巴・漢等の諸伝によると両親結婚して二十余年後嗣なく、偶々秋祭の日母摩耶夫人夢に白象の右脇より胎内に入る瑞祥を得て懐妊され、臨月近くなつて御産の爲め実家に帰られる途中ルンビニーの園に休憩された。丁度陽春のうらゝかな花咲き競う四月八日、沙羅樹のもとで誕生され、天も地も歓びの声をあげて祝福したと伝える。併し人生の喜び悲しみは無常で思うに任せない。摩耶夫人は太子の名付後に亡くなり、その妹さんによつて養育されることゝなつた。

又伝記による七才の時、父王と農耕の祭に出席された際、農夫の掘起す土中より出た小さな傷虫を小鳥が喰え去るのを見て、「あわれ、生きものは互いに食い合う」と呟き、独り樹蔭に静思されと云う。生れて間もなく母に別れ、今また生物の噛み合う有様を見て、太子の心には早くも人生の苦惱が強く刻みつけられ、成長と共に益々もの思いに沈まれる。そのようすを見て父王は痛く苦慮され何とか太子の心を引立てようと太子十九才の時、親族の娘を妃として迎えられ、時光遷流十年、その間太子は相不変思い続けられた。即ち「人間が生き

ているということは、結局何かを求めているのだ、しかしこの求めることについて誤つたものを求めるのと、正しいものを求めるのと二つある。誤つたものを求めているというのは自分が考いと病と死とを免れ得ないのに、同じようにそれを求めているのである。正しいものを求めることは、この誤りを悟つて相対の生・老・病・死を超えた、人間の苦しみ悩みのすべてを離れた境地を求めることである。いまの自分は思うにこの誤つたものを求めているのに過ぎない」と考えに考えて太子二十九才、一子ラーフラの誕生の時、決意して出家学道の旅に出られたと伝え、又古伝によると四門出遊（老・病・死・出家）と云うことが出家の動機としてい

る。出家後は「極端な苦行をしよう」と一日に一食、三日に一食、七日に一食と云う人間の限界を超えた六年の難行・苦行を敢てされた。併しいかなる難行も苦行も太子の求めるものを与えてくれない。そこで六年の苦行をも降履の如く捨てガンドス河に苦行の汚れを洗い、善生娘の供養を受けて養身し、天地の間にとゞ独り静に樹下に端座し死を堵けて最後の思念に入られ、「血は涸れよ、肉は爛れよ、骨は腐れよ、悟を得ない限り、われはこの座を立たい」、これがその時の太子の決心であつた。かくて血は流れ、肉は飛び、骨は砕ける心の苦闘を経て、天眼を清め、縁起を觀じ、遂に十二月八日暁の明星を仰ぎつつ、太子の心に光が輝き悟りが開け、こゝに釈尊と云う仏になられた。太子三十五才。

その後は潤けるものが水に赴き、飢えたるものが食を求めるように釈尊の下に集まり、幾百万の人々にまことの生甲斐の伝道をされること四十五年、伝道の途中、病に罹られ、三ヶ

月の後涅槃に入ること予言し、クシナガラクシナガラの双樹の間に臥し、多くの典子に懇な教を垂れ
仏としてのつとめをなし終り、靜に涅槃の雲にかくられた。感銘の遺戒を二、三摘記する。

「弟子達よ、放逸なるとなかれ、わが成等正覚も、無量の諸善もたゞ不放逸によりて得
たり。弟子達よ精進勵行して生死を超越せよ、これ最後の教戒なり」

「弟子達よ、おのおの自らを燈とし、自らを頼りとせよ」

「弟子達よ、教はつねに聞き、つねに考え、つねに修めて捨て、けならない。もし教の如
く行ふならば、つねに幸に充されるであらう。」

「弟子達よ、教の要は心を修めるにある」

思うに現代は人類の歴史における一大転換期であり、機械・物質の面より、精神文
化即ち心の面への転換の時期である。即ち科学は驚異すべき進み、月への旅行もやがて可能
という現実にも必ずしも人類の幸福が伴うていとはいえない。幸福と云うものは沢尊が「自
らを燈とせよ」と教えられたように自分の存在の意義を見出すこと。即ち絶対の慈光のうち
に一切衆生が共生している信機・信法の宗教的自覚こそ生けとし生けるものの本質的な幸福
を齊らすものと教えられる。この素破らしい仏教の眞実を涅槃会に当り現代を救う原理とし
て学衆と共に深く反省したいものである。(二月十三日記)